

写真=吉田千秋

仮名手本忠臣蔵

服部幸雄

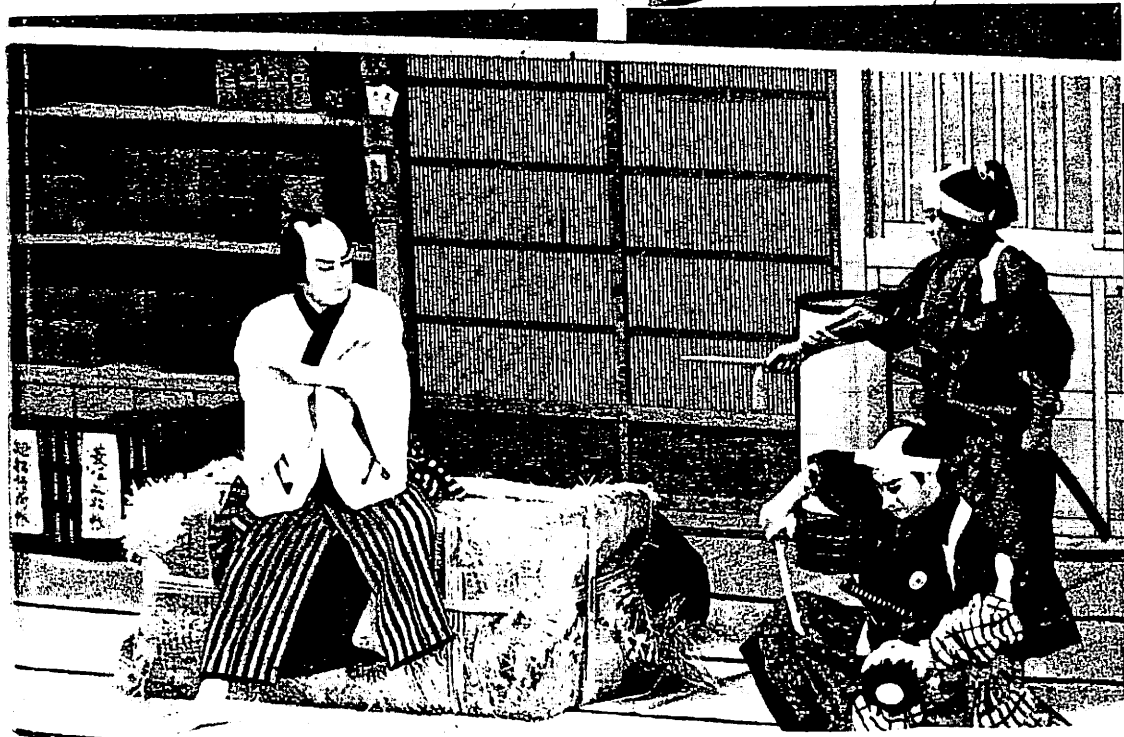
編著

監修
郡司正勝
廣末保
服部幸雄
小池章太郎
諏訪春雄

〈九段目〉
中村歌右衛門（戸無瀬）、
中村雀右衛門（小浪）



〈十段目〉
八代目坂東三津五郎（天川屋義平）



し。この仕組^{しぐ}み、勘平は落^おち入る。双^ふ方よろしく三^{さん}重^{じゆう}にて

幕

- 一 絶命する。
二 門口の外に出て、上手に向かい合掌する二人侍と、内で落ち入る勘平およびこれに取り縋^{すが}って泣くおかやの双方。
三 ひ用語集

大星由良之助

同 力弥

寺岡平右衛門

斧九太夫

鷺坂伴内

矢間重太郎

千崎弥五郎

竹森喜多八

一力の亭主

幫^{はな}間大勢

駕籠舁^{かごり}き二人

仲居^{なぐい}大勢

傾城^{けいせい}おかる

七段目

祇園^{おんいちりき}一力の場

- 四 京都市東山区八坂神社の西門前の四条通りの両側、大和大路までを祇園町といい、江戸時代には私娼街であつた。現在、京都の代表的な花街であり、一力茶屋では三月二十日に大石忌を行っている。
五 「ほうかん」「たいこもち」とも。「牽頭」とも書く。遊客に従つて、その機嫌をとり結び、芸をし、酒興を助けることを職業とする男。男芸者ともいった。
六 遊廓や料理屋で客を接待し世話をする女性。
七 「けいせい」は遊女のこと。もと中国の『漢書』に出ていることばで、絶世の美女の色香におほれて、城や国を傾け滅ぼしてしまうことから、美女のことをいった。「傾国」ともいう。のちに遊女を指すことばとなって一般に用いられた。ここでは、祇園一文字屋の抱え遊女となつたおかるのこと。

（本舞台三間の間、高足の二重本縁付、正面白洲階子、後ろ一面長暖簾、上の方二階家手摺付、障子、九つ梯子、手水鉢、釣燈籠、手拭かけ、飛石の捨石、すべて祇園町一力揚屋の体、ここに赤前垂の仲居立ちかゝり居る。へ花に遊ばゝの」唄にて賑やかに幕明く）
 （ト踊り地になり）

仲居○ なんと皆さん見やしゃんせ、日ごとに見ても見あきぬは祇園町の夕景色。

仲居□ それいなあ、軒端に並ぶ提燈の水に映れば闇の夜も、河原を照らす星の影。

仲居△ 芸子さん方、牽頭衆の騒ぎの唄の新文句、東なまりを加茂川で洗うて見たい京の水。

仲居× ほんに自慢じゃないけれど、江戸さん方もなか／＼に、きょうといものじやと仇口に、いつそおだてゝあつたわいなあ。

仲居○ それはそうと、最前から久しい間、大方由良大尽様のお待ちかねであらう程に、早う座敷へ行こうわいなあ。

三人 ほんにそうしようわいなあ。

仲居○ そんなら皆さん。

皆々 行こうわいなあ。

（ト踊り地になり、仲居奥へ入る。向こうより九太夫、羽織衣裳、大小にて、跡より伴内、同じ形にて出て来たり、すぐに舞台へ来たり）

九太夫 誰ぞ頼もう、亭主は居らぬか。亭主々々。

（ト呼ぶ。奥より亭主、袴着付にて出て来たり）

亭主 これは／＼忙しいに、どなた様じゃ。（ト思入れ）や、これは九太夫様でござりまするか。御案内とはきょうとい／＼。

九太夫 イヤ始めてのお方を同道いたした。きつう取り込みのように見ゆるが、一つ上げます座敷はあるか。

亭主 ござりますとも／＼。今晚はあの由良大尽の御趣向で、名ある色たちを掴みこみ、下座敷はふさがってござりますれど、亭座敷が明いてござりまする。

九太夫 すりやまた蜘蛛の巣だらけであらう。

亭主 また悪口をおっしゃりまする。

九太夫 イヤサ、よい年をして女郎の蜘蛛の巣にかゝるまい用心いたそう。

亭主 これはきつい事、下にはおかれませぬ二階座敷、ソレ燈をともし仲居

一 口用語集

一 大道具の一。舞台の上を高くするために、土台として据える木製の台を「二重」という。そこに家の床を組んだり、土手や山を作る。七寸を単位として、その倍数を高く積み上げる。一尺四寸を常足（つねあし）、二尺一寸を中足（ちゅうあし）、二尺八寸を高足と呼ぶ。

二 前方に本式の縁側がついている二重。

三 大道具の一。能舞台の正面に設けられている三段の梯子（はしご）と同じ形の階段の称。

四 段が九つある梯子。

五 大道具の一。屋外の場の舞台に置く石のつくり物の称。

六 遊里で、客が遊女屋から高級な遊女を呼んで遊興する店。江戸吉原では宝暦十年（一七六〇）ごろになくなって町名だけが残った。

七 赤い色の前掛け。遊女屋の遺手（やりて）、仲居の他、宿屋や茶屋の女がこれを掛けていた。

八 浄瑠璃の本文には「花に遊ばゞ祇園あたりの色揃え、東方、南方、北方、西方、みだの浄土かぬりに塗（ぬり）立、びつかりびか／＼云々」とある。これを下座唄にして歌ったのである。

九 下座音楽の一。上方の廓、揚屋、茶屋などの場に用いる三味線の合方。開幕や人物の出入りに際しては、太鼓入りの振やかな囃子（はやし）を添える。いかにもはなやかで、浮きに浮く遊樂の雰囲気をかもし出すのにふさわしい音楽である。

一〇 加茂川の河原。

一一 芸者、芸妓。歌舞、音曲をもつて宴席に興を添える役目の女性。

一二 結構だ。すばらしい。

一三 長い間。長時間。

一四 本来は大金持をさす語だが、遊里では金銭を多く気前よく散財して豪遊する上客のことをいう。

一五 「大臣」とも表記する。

一六 花道の揚幕の方。底本は浄瑠璃の本文に忠実に九太夫・伴内の入りから見せている。これを省略して、一八六ページ一四行目の三人侍の出から出すやり方、さらに省略して、一八八ページ二三行目の「めんない千鳥」から出すやり方も行われている。

一七 不思議なこと。腑（ふ）に落ちないこと。九太夫は、この家のことをよく知っている客なのに、片苦しく玄關で案内を乞うので、不思議がついている。

一八 「取り込み」は混雑。人の出

ども、お盃お煙草盆じゃ。

(ト言いながら、亭主奥へ入る。九太夫、伴内、あたりを見廻し、思入れあつて)

九太夫 何と伴内殿、由良之助が体御覽したか。

伴内 九太夫殿、ありやいつそ氣違いでござる。段々貴殿より御内通あつても、あれほどにあらうとは主人師直公にも存ぜず、拙者にまかり上つて見届け参れ、心得ぬ事あらば早速に知らせよと申し付けましたが、さてく我もへんしも折れましてござる。シテ伴力^{せがれ}弥めは何といたしたな。

九太夫 こいつも折節はこゝへ参り、ともに放埒^{はほうち}、指合くらぬが不思議の一つ、今晚は底の底を探し見んと、心企^{ハタ}みをいたして参つた。密々にお咄し申そう、イザ二階へ。

伴内 まずく貴殿から。

九太夫 しからば、こうお出でなされい。

(ト兩人思入れあつて奥へ入る。踊り地になり、向こうより弥五郎、重太郎、喜多八、羽織袴、大小にて出て来る。跡より平右衛門付き添い出て、すぐに舞台へ来たり)

重太郎 弥五郎殿、喜多八殿、これがかの由良之助殿の遊び茶屋一力と申す

のでござる。

弥五郎 いかさま承り及んだ揚屋。

喜多八 賑わしい儀でござる。

重太郎 コリヤく平右衛門、よき時分に呼び出そう。お身は勝手に控えて居やれ。

平右 畏りました。よろしくお願い申し上げます。

(ト平右衛門、三人の草履^{ぞうり}を持つて下手に入る)

重太郎 誰ぞ頼みたい。

三人 案内頼む。

(ト奥より仲居出て来たり、三人を見て)

仲居△ アイく。(ト思入れ) どなたさんでござんすえ。

重太郎 イヤ、我々は由良之助殿に用事あつて参つた。奥へ往て言おうには、矢間重太郎、千崎弥五郎、竹森喜多八でござる、この間よりせつく迎いの人を遣わしますれどお帰りのないゆえに、三人連れで参りました。ちと御相談申さねばならぬ儀がござるほどに、お逢いなされて下されと、きつと申しておくりやれ。

仲居△ それは何とおお気の毒でござんすが、由良さんは三日この方の飲み

(前ページ注続き)

入りがはげしいこと。大変混雑しているらしく見えるが。

元 おあげする。おとしする。

三 思いつき。アイディア。

三 それと知られた遊女たちを呼び集めて。遊女や若衆を座敷へ呼ぶことを「囃む」という。

三 一階の座敷。下の座敷。

三 庭の中に建ててある東屋(あずまや)ふうの座敷。

三 庭の中にある離れで、平素は使っていない座敷だから、蜘蛛の巣がいっぱい張っているだろうと冗談を言った。

三 蜘蛛の一種の「女郎蜘蛛」に言いかけて、こわい遊女にひつかからないように気をつけようと戯れ言をいったもの。

三 おろそかには扱えませんが、ということを下座敷には置かれないので二階座敷へ通すと言いかけた。

一 まったく。本当に。
二 いろいろと。あれこれとくわしく。

三 内密の知らせ。

四 不審な動き。

五 「我」は我意。「へんし」は偏私。ともに自分が思いこんでいる片寄った考え。「我」も「偏私」も折れたというから、「私の思いこんでいたことが間違っていました」の意となる。

六 酒色にふけり遊興すること。

七 「差合いを繰る」はさしきわりを考えて遠慮すること。父子が揃って廊で遊ぶことはさしきわりがあると考えて、たがいに遠慮すべきなのにそれもしないのが不思議の一つだ。

八 計画。心中のくふう。

九 花道の揚幕の方。

二 三人侍の入り込みに、足輕の平右衛門が付いて花道を出て来る。ここから上演する方法をとる場合、浄瑠璃の本文のとおり平右衛門が付いて出るやり方と、付いて出ないやり方がある。後者の演出では、一九一ページの「暫くくく」で下手から登場することになる。

二 なるほど。相手のことを肯定的に受けとめて、感動的に発することば。

三 たびたび。しばしば。「節々」または「切々」と表記する。

三 三日間休みなしにずっと。

つゞけ、お逢いなされてからが他愛はあるまい。本性はないぞえ。
重太郎 ハテさて、まあそう言うておくりやれ。

仲居△ アイ〜。

(ト奥へ入る)

重太郎 弥五郎殿、お聞きなされたか。

弥五郎 承つて驚き入りました。初めのほどは敵へ聞かする計略と存じましが、
たが、^四いこう遊びに実が入り過ぎまして、合点が参らぬ。

喜多八 なんと、この喜多八が申したとおり、魂が入れ替わつてござろうが
の。いっそ一間へ踏込み、

重太郎 イヤ〜、とくと面談いたした上。

弥五郎 なるほど、しからばこれにて、

三人 相待ち申そう。

(ト駒鳥の合方になり、仲居先に、牽頭皆々付いて、由良之助、羽織
脱ぎかけ、めんな千鳥をして出て来る。皆々よろしく)

皆々 手の鳴る方へ〜。

由良 とらまえて酒飲まそ〜。

皆々 由良鬼、またい〜。

由良 とらまえて酒飲まそ〜。(ト思入れ)

(ト皆々あつちこつちへ追わえて、ト重太郎をとらえる。皆々思
入れ)

コリヤ〜捉まえたわ。サア酒〜。銚子持て〜。

仲居△ モシエなあ、違うわいなあ。

(ト由良之助、手拭を取る)

由良 南無三宝、仕舞うた。これも御免、他愛〜。

皆々 それ見やさんせいなあ。

弥五郎 イヤこれ仲居たち、我々は大星殿に用事あつて参つた。暫くこの場
を遠慮しておくりやれ。

仲居○ 皆さん聞きなさんせ。何じややら鹿爪らしゆう言わしやんすぞえ。

重太郎 エ、無駄な事言わずと、早く奥へ行きやれさ。

仲居□ オ、こわ。わたしらは由良さんのお伽じやわいなあ。

喜多八 エ、べり〜とやかましいわえ。早く奥へ、

三人 行かぬかえ。

仲居○ オ、こわ。(ト思入れ) し〜〜、お獅子はどこじや、お獅
子はどこじや。

一 思慮分別はないだろう。

二 酒に酔っぱらったり、睡魔に
おそわれて正体のないだらしな
さまになっているよ、の意。

三 由良之助は酒を飲み遊興三昧
で、まるで敵討ちをするくわだて
はない、ということ故意に敵高
師直方の隠密に聞かせ、それと報
告させて油断させようというはか
りことだと思つていたが。

四 大そう遊びに熱中していて。
「実が入る」は心をこめて熱心に
するの意。「身が入る」と同意。

五 下座音楽の一。ゆつたりとし
た鬼ごつこや、子どもの春駒の遊
びなどの場面に使う三下りの三味
線音楽。「七段目」のこの場面に
演奏されるので有名。これ以前を
すつかり省略してしまい、定式幕
を引くとすぐに長暖簾から由良之
助をはじめ、仲居、芸者、習問ら
が「めんな千鳥」をして出てく
るところから始める方法が行われ
る。

六 子どもの遊びの一つ。鬼ごつ
こを上方でこう呼ぶ。布で目をか
くした鬼が、「鬼さんこちら、手
のなる方へ」と歌いながら手を打
つて逃げる者を追つてつかまえて
遊ぶ。「めんない」は目がないの
意で、目かくしのこと。

七 「またい」には諸説あつて定
まらない。「待った待った」の意、
あるいは「まだい」として「まあ
だよ」の意ともする。

八 用語集

九 しまった。失敗した。

一〇 「酒たわい」の語があり、こ
れの略かと思われる。酩酊した、
酔っぱらった。「たわい」は「た
わいなし」の略形で、酔ったり寝
ぼけたりして正体のないこと。

一一 小むずかしい様子で。遊樂と
粹の巷である色茶屋に似合わしか
らぬ野暮で武張ったことばづかい
をしたことを非難してこういつた。

一二 話相手になつて退屈を慰める
こと。看護すること。

一三 べらべらと。よくしゃべるさ
まを表わす語。

〔次ページ注〕

一 お目にかかりに來ました。

二 強い語調できつぱりという。

三 この狂言では高師直の屋敷が
鎌倉ということになっているので、
敵討ちのための旅の出立のこと。

(ト皆々手を打ち、わやく／＼言うて奥へ入る。三人思い入れあつて)

重太郎 由良之助殿、矢間重太郎でござる。

喜多八 竹森喜多八でござる。

弥五郎 千崎弥五郎、御意得に参った。

三人 お目覚まされましよう。

(トきつと言う。由良之助、起き上がり)

由良 これは／＼、打ち揃うてようこそお出で、何と思うて。

三人 鎌倉へ打ち立つ時は、いつごろでござるな。

由良 さればこそ大事の事をお尋ねさるゝ。丹波与作が歌に、江戸三界へ行かんして、ハ、ハ、ハ。(ト思い入れ)

(トよろしくあつて)

御免候え、他愛々々。

(トまた寝ころぶ。三人、思い入れあつて)

重太郎 ヤア、酒の酔い本性違わぬ。

弥五郎 性根がつかずば我々が、

喜多八 酒の酔いを、

三人 覚まさせましよう。

(ト三人、立ちかゝる。この時、下手にて)

平右 まず／＼、暫く／＼。(ト思い入れ)

(ト平右衛門、出て来たり、三人を止めて)

はゞかりながら、お三人様へ申し上げます。この平右衛門が一言申し上げたき儀がござります。暫くお控え下さりましよう。

弥五郎 その方は平右衛門、申すことあらば、

三人 早く申せ。

平右 由良之助様、寺岡平右衛門めでござりまする。御機嫌の体を拝しまして、いかばかりか大慶至極に存じ奉りまする。

由良 フウ、寺岡平右衛門とは、アノなんで、前かた北国へお飛脚に行かれた足の軽い足輕殿か。

平右 さようでござりまする。殿様御切腹を北国にて承りまして、南無三宝と宙を飛んで帰りまする道で、お家の騒動の一家中ちり／＼と承った時の無念さ、奉公こそ足輕なれ、御恩は変わらぬお主の仇、おのれヤレ師直めを一討ちと鎌倉へ立ち越え、三ヶ月が間非人となつて付けねらいましたけれども、敵は用心敵しく、近寄る事も叶いません。所詮腹かつさばかんと存じましたが、国元の親の事を思い出しまして、す／＼帰りましたところ

史実の赤穂事件ならば、当然江戸へ下るところである。

四 思つたとおり。やつぱり。

五 近松門左衛門作『丹波与作待夜(まつよ)の小室節』(上巻)

に、お伽小姓の歌として「山も見へざるかりそめに、江戸三がいへいかんして、いつもどらんすことじややら、ころしてをいていかんせの、はなちはやらじとなきければ」と出ている。当時上方で流行した歌の一つで、「心中江戸三界」の題で『落葉集』(七)「古来中興当流はやり歌」に入っている。思う男が江戸くんだりへ行くのを引きとめて遊女が泣き悲しむという内容の口説き歌である。「三界」は地名につづけて、遠く離れている意を表わす。「……くんだり」に当たる。

六 人は酒に酔っていても、その本心を忘れてしまうことはないものだという諺。「酒の酔い本性忘れず」ともいう。こういう諺があるのだから、いくら酔っぱらっていても本当の心を忘れてしまっているはずはない、性根がつかないのなら云々、と次へつづく。「性根」は正気のこと。

七 恐れながら。この上もなく。へどれほどか。この上もなく。

八 モデルとなつた実説の寺坂吉右衛門は吉田忠左衛門組下の足輕、三兩二分二人扶持という身分で、士籍に連なっていない。四十七士のうち、吉右衛門だけが足輕の身分であるのに、討入りに参加している。この史実をふまえた脚色。おかるの兄としたのは虚構で、俸禄を五兩に三人扶持と設定した。「足の軽い足輕」と洒落ていったもの。

九 江戸時代、士農工商の下位に置かれた階層の人。制外者。

二 つまるところ。こうなつたからには。

三 腹をかき切る。「かつ」は下の動詞の意味を強める接頭語。「かつ飛ばす」など。

〔次ページ注〕

一 太陽のこと。天地を支配する神。神のお告げの意となる。

二 皆々様が主君の敵を討とうと一味の連判をしておられることを知りました。

三 大急ぎで。あわてて。

四 いちずに。ただそのこと(敵討ちの一味連判に加わりたということ)ばかりをお願いしました

ろ、天道様のお知らせにや、いづれも様の一味連判、

重太郎 コリヤ。

平右 なぞと承りますると、ヤレ嬉しや有難やと取る物も取りあえず、あなた方の御旅宿を尋ね、ひたすらお願い申し上げましたれば、でかした、愛い奴じゃ、お頭へお願い申してやろうとのお詞に縋り、これまで推参仕りました。師直が屋敷の、

(ト言おうとするを)

由良 ア、コレく、アそこもとは足輕では無うて、大きな口輕じやの。なんと牽頭持なされぬか。もつとも、私も蚤の頭を斧で割ったほど無念なとも存じて、四五十人一味をこしらえて見たが、味な事の、よう思うて見れば、仕損じたらこの方の首がころり、仕おゝせたら跡で切腹、どちらでも死なねばならぬというは、人參呑んで首くゝるようなもの、殊に其元は五両に三人扶持お取りなさるゝ足輕殿、お腹は立てられな、はつち坊主の報謝米ほど取っていて、命を捨てゝ敵討ちしようとは、そりや青海苔貰うた礼に太々神樂を打つようなものじゃ。我が知行は千五百石、貴様とくらべると、敵の首をはかり枴で量るほど取つても釣り合わぬ。ところでやめたナ、聞こえたか。とかく浮世はこうしたものじゃ。(ト思入れ)

(ト傍にある三味線を取つて弾きかける)

なぞと、こう弾きかけたところは、たまらぬく。

平右 これは由良之助様のお詞とも覚えませぬ。わずか三人扶持取る拙者めでも、千五百石のあなた様でも、今日つなぎましたる命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押すに押されぬお家の筋目、殿の御名代お勤めなさるゝ御歴々様方の中へ、見る影もない私めが、差し加えてとお願い申すは、はゞかりとも慮外とも、ほんの猿が人真似に、お草履を掴んでなりとも、お荷物をかついでなりとも参じましょう。お供に召し連れられて、ナ、申しく。(ト思入れ)

(トこの内、山良之助寝る。平右衛門、いろく思入れあつて)
コレ申しく、これはしたり、寝てござる(ト思入れ) そうな。

重太郎 これさ平右衛門、あつたら口に風引かすまい。由良之助殿は死人も

同然。

弥五郎 矢間殿、竹森殿、もう本心は見えましたな。

喜多八 いかにも、申し合わたたとおり、

兩人 はからいましょう。

重太郎 いかさま、一味連判の者への見せしめ、イザ、いづれも、

ところ。

五 よくやった、神妙な奴だ。
六 おしつけにも押しかけて参上しました。

七 足輕ではなくて、大変な口輕だなあ。洒落でいったもの。「口輕」はよく考えないで、軽率にものをしやべること。余計なことまでしやべってしまうほど、口數が多いこと。またその人。

八 極めて僅かなことのためとえ。ほんのちよつぱり無念だとも思ひ。九 妙なことのう。

二 失敗したら。しくじったら。

三 なし遂げることができたら。三 高価な高麗人參を買つて病氣は直つたが、そのための借金で首をくるる羽目になるの意で、自分の身のためにしたことが、かえつて身を滅ぼすことになるたとえ。

三 「扶持」は扶持米で、一人一日につき五合の基準で毎月給付される給与のこと。三人扶持は一日一升五合の給米。

四 きわめて小禄であることのためとえ。「はつち坊主」は物もらいをして歩く托鉢(たくはつ)坊主のこと。乞食坊主。「報謝米」は坊主が経を讀んだ御礼として与える一握りの米のこと。

五 ほんの僅かな物をもらつて、

多額の返礼をすることのたとえ。ばかばかしいほど不つりあいであることの例。「青のり」は伊勢の名産で伊勢参宮の土産にした。安い土産物の例。「太々神樂」は伊勢神宮に奉納する神樂のこと。

六 武士が支給される俸禄。史実の大石良雄の知行も千五百石。

七 「はかり枴」という語はない。現行台本は淨瑠璃の本文のとおり「斗升(とます)」「斗」の「草体」を「計」と読んだ誤りか。

八 以下の歌詞の音頭があつたらしい。わざとあきらめていと投げやりな印象を与えるため、流行の歌を使つてまぎらかしたところ。九 主君からいただく給与でいままでつなぐことのできた命が一つであることにおいては同じです。三 争つても争うことのできないのは家柄です。「筋目」は家系、家柄。

三 代わり。代理。

四 格式の高い家柄の人たち。五 見るにたえない。家柄もなく身分も低い。

六 恐れつつしむべきでもあり、おしつけなことでもあるが。

七 これはまあ、どうしたものか。意外なことに驚き呆れて発する語。

（ト三人立ちかゝるを、平右衛門留めて）

平右 暫くく。

（ト三人をちよつと立ち廻つて、きつと留めて）

三人 手向かいか。

平右 お手向かいはいたしませぬ。しばらくお待ち下さりませ。（ト思い入れ）ア、つくぐ思いまわしますれば、主君にお別れなされてより、今日の只今まで、木にも茅にも心を置き、人のそしりあざけりを、じつと耐えてござるからは、酒でも無理に参らずば、よもお命は続きますまい。

（ト思い入れ）飲んだ酒なら酔わずばなるまい。醒めての上の御分別。

三人 無礼者め。

平右 平に。

へ無理に押さえて三人を、伴う一間は善悪の、あかりを照らす障子の内、影を隠すや。

（ト無理に三人を奥へ入れ、平右衛門残り、いろくあつて奥へ入る）

へ月の入る山科よりは一里半、息を切つたる嫡子力弥、内を透かして正体なき、父が寝姿、起こすも人の耳近しと、枕許に立ち寄つて、轡に代わる刀の鐐音、鯉口しゃんと打ち鳴らせば、むつくと起きて、

（トこの文句の内、向こうより力弥、状箱を持ち出で来たり、枝折戸の内を窺う。思い入れあつて、由良之助が傍へ行き、刀の鐐音さして、花道へ立ち戻り控える。由良之助起き上がつて、辺りへ思い入れあつて、庭下駄をはき、謡を諷しながら花道へ来たり）

由良 ヤア力弥か、鯉口の音響かせしは急用あつてか。密かにく。

力弥 只今御台顔様より急のお飛脚、密事の御状。

由良 シテ、他に御口上はなかったか。

力弥 敵高師直。

由良 シイ。

へ敵と見えしは群れいる鴟、

（前ページ注続き）

「せつかく話しても何の役にも立たないから、むだなことは言わない方がよい。「口」に風ひかす」は無駄ごとを言うたとえ。「あつたら」は「あたら」で、りっぱなもの、価値あるものに對して、それが失われたり、欠けたり、無視されたりしてむなしく終つてしまふのは残念だ、惜しいという感情を表わす語。

一 諺。落人などが、木を見ても萱を見ても敵かと思つて用心をするように、周囲に十分気を配り、細心の注意を払っているたとえ。
二 悪口を言つたり、嘲笑したりすること。史実の大石良雄が「昼行燈（ひるあんどん）」「赤穂でうて阿呆浪人、大石軽うて張り抜き石」などと世人から嘲笑されたことをふまえている。
三 酒がさめてからよくお考えになつて下さい。

四 次の場面で、由良之助の本心の善悪が明らかになるという意と、明り障子のうちに悪人の九太夫がひそんで様子をうかがっていることを含ませて表現している。

五 歌舞伎はここで平右衛門が仲

居を呼んで寝ている由良之助の枕や夜具を運んで来させる入れ事の演出がある。言いつけられた仲居がつい「アイアイ」と大声をあげようとするのを、口に手をあてて「シューッ」ととめることを繰り返して客を笑わせたりする。

六 「月の入る」は「山」にかかる序。山科は山城国宇治郡の地名。現京都市東山区に入る。九段目がその舞台となるが、大星の一家が閑居しているところ。史実の大石良雄が山科に退隠したことをふまえた脚色である。

七 息せききつて道を急いで来た。八 実子。

九 「心がけある武士は轡の音に目をさます」という諺による。武士は寝ている間も油断せず、馬のくつわの音を聞けば目をさます、の意から、その轡の代わりになる。

二〇 刀を少し抜き、ばちんと音をさせて元へ戻す、その時の音。

二 刀の鞘の上端の部分という。

二 花道の揚幕の方。

三 手紙を入れて運ぶ箱。文箱。

四 庭などにある簡素な開き戸。

現行演出によるこの場面は「いつものところ」ではなく、花道の七三の位置に枝折戸を置く。

五 力弥が来ていることを人に気

(トよろしく思い入れあつて)

力弥 師直には帰国の願い、近々本国へ罷り帰る。委細の儀はお文との御口上でござりまする。

(ト状箱を出す。由良之助取つて、中の封文を取り上げ)

由良 その方は宿へ帰り、夜のうちに迎いの駕籠、(ト思い入れ) 行けく。
力弥 ハッ。

へはつとためらう隙もなく、山科さして、

由良 祇園町を離れて急げく。

へ引き返す。

(トこの文句にて、力弥いっさんに向こうへ入る)

へまず様子氣遣いと、状の封を切らんとする所へ、

(ト由良之助舞台へ来て、封を切らんとする所へ、奥にて)
九太夫 大星殿、由良之助殿く。(ト思い入れ)

(トこの声にて、由良之助文を懷へ入れる。九太夫出て来たり)
斧九太夫でござる。御意得ましよう。

由良 これはく久しやく。一年も逢わぬうち、よつたぞやく、額の皺、伸しにお出でか。あのこゝな薙破りめが。

(ト九太夫を叩く)

九太夫 イヤ由良殿、大行は細瑾を願ずと申すが、人のそしりも構わず遊里の遊び、大功を立つる基、あつぱれ大丈夫、未頼もしゅう存ずる。

由良 これは堅いわく、石火矢と出かけたな。

九太夫 ヤア由良之助殿、まこと貴殿の放埒は、

由良 敵を討つ所存と見えるか。

九太夫 おんでもない事。

由良 忝い。四十に余つて色狂い、馬鹿者よ氣違ひよと笑われると思うたに、敵を討つ手だてとは九太夫殿、ホ、ウ、嬉しいく。

九太夫 スリヤいよく、其元には主人塩冶の仇を報ずる所存はないか。

由良 毛もないく。家國を渡す折から、城を枕に討死とお手前は言うたの

〔前ページ注続き〕

づかせないため、あたりを見廻した後に、謡の一節をうたいながら花道へかかる。謡は役者によつていろいろで、得意の小唄にした人もある。

三 貴人の奥方。ここは塩冶判官の奥方の顔世を指している。

四 口頭でのいい伝え。伝言。

五 謡曲「八島」の一節を謡う。歌舞伎の入れ事の一つ。力弥がうっかり「敵」といったのをごまかすために「敵と見えしは」の謡にまぎらした。

一 師直が近々鎌倉を離れて本国へ帰ってしまうので、敵討ちの決行を急ぐ必要があることを知らせた文なのであろう。
二 くわしいことは文に書いてあるとの口上でした。

三 このせりふは歌舞伎の入れ事。現行台本は「祇園町を離れてから急げ」。天下泰平、遊興の巷である祇園町を血相かえて走つたのは人に怪しまれるから、町を離れてから急げと、周到な注意を与えたとする解釈による。

四 お目にかかりましよう。

五 久しぶりだ。

六 皺(しわ)がよつたぞ。

七 皺をのばしに米られたのか。「皺のばす」は老人が氣ばらしにすることに言うので、遊里へ氣ばらしに米られたのか、の意になる。八 老人の好色漢のこと。「薙」は寝る時に敷く物。六十歳を過ぎてもから女狂いすることを「薙を破る」といった。

九 謔。大きな行いを成し遂げようとする者は、わずかの疵(欠点)などは気にしないの意。

一〇 「大行」に同じ。偉大な功績。
一一 江戸時代の初頭に、西洋から伝来した大砲のこと。石、鉄、鉛などを発射した。「火矢」は火薬を仕かけて放つた矢のこと。ここは、堅いものたえとして用いてある。浄瑠璃の本文は、このせりふにつづけて「さりとはおかれい」とある。そんな堅い話はやめになされよ。

一二 酒色にふけりだらしないこと。
一三 当然のことだ。いうまでもないことだ。

一四 「氣もない」が正しい。まったくない。少しもない。

一五 四段目の評定場の経緯をいつている。一一四一一六ページ参照。

を、身ども一人遮^{さへぎ}つて、お金配分と言うたのは、この楽しみがしたさ故、あの折足利の討手を引き受け、城を枕に討死なすか、または主人の跡を追^いい殉死^{じゆんし}して見さつしやれ、お手前も色酒に皺^{しわ}を伸ばす事はなるまいが。そこを謀^{はか}つて由良之助が、お金配分したは智恵^{ちゑ}であろうがな。サア、昔のよしみ思うなら、堅身^{かたみ}をやめて砕^{くだ}けおれ。

九太夫 いかさま、この九太夫も昔思えば信田^{ハシのた}の狐、化けあらわして一献^{けん}汲もうか。(ト思い入れ)させ居^おれ、飲むわ。

由良 飲み居^ゐれ、さすわ。

兩人 コリヤ咄^{はな}せるわえ。

由良 サア、銚子^{ちうし}もて。(ト思い入れ)皆来い。

(ト奥にて)

皆々 アイ。

(ト奥より亭主、仲居、牽頭^{けんとう}、皆々、酒肴^{しゆきやう}を持ち出て来たり)

由良 コリヤ、今日は由良之助が九太夫殿への馳走^{ちしう}、皆寄つて面白い事せい。

仲居 面白い事なら見立てがようござりましょう。

皆々 サア、見立ての始まり。

(ト見立ての合方になり、皆々見立てよろしくあつて)

梅干^{うめかん}なんぞはどでごんす。

(トわが頭を狭^{はさ}む)

由良 コリヤ古い。サア、酒々。

(ト九太夫に突き付ける。九太夫飲んで)

九太夫 サア由良之助、さし申そう。

由良 忝^{かたじけなく}い。

(ト盃受け取り)

九太夫 ドレ、肴^{さかな}いたそう。

(ト傍^{そば}に有り合う蛸肴^{たこさかな}、はさんでずつと差し出せば、

つて)

(ト九太夫、蛸^{たこ}をはさんで由良之助に差し出す。由良之助思い入れあ

つて)

由良 手を出して足を戴^{いた}く蛸肴^{たこさかな}。(ト思い入れ)ドリヤ賞飫^{ハしようがん}いたそう。

(ト喰わんとするを、九太夫押さえて)

九太夫 コレ、由良之助殿、明日は主君塩冶公の御命^{みこと}日。取り分け逮夜^{二〇たいや}はな

一 主人の死のあとを追つて家来が死ぬこと。

二 前出。気晴らしをすること。

「色酒に」とあるから、遊里に遊んで、遊女に戯^{あそ}れかけ酒を飲んで気晴らしをする。

三 あらかじめ計略を立てて。

四 智恵のあるやり方。

五 親しい交わり。

六 堅いことはよしにして、粹

(いき)にくだらけよく。

七 そういえばそうだ。相手のことを肯定的に受けて発することば。なるほど、そのとおり。

八 「信田」は正しくは「信太」

で、和泉国信太郷。現在の大阪府

和泉市王子町。昔、信太森に白狐

が住んでいて、陰陽博士として有

名な安倍晴明を生んだという伝説

があった。いわゆる「葛(くず)の

葉」の伝説。これをもとにした戯

曲や小説は数多い。浄瑠璃の「芦

屋道満大内鑑」ほか。九太夫が以

前は遊興好きだったとする設定。

九 狐が化けているのだから、正

体を現わして、酒をくみかわそう

か。「献」は一杯の酒。

二〇 話が通じるわ。

二一 もてなし。以下、次ページの

「傍に有り合う蛸肴」までの見立

ての件りは歌舞伎の入れ事。

二二 身近にある品物を意想外の物に見立ててその思いつきのおもしろさを楽しむ座敷遊び。

二三 この狂言のここだけに用いる

賑やかな合方の称。

二四 仲居や附問が、一人一人立っ

て次々と思ひ思ひの見立てをして

みせる。以前は、その趣向は役者

に任されていたので、地位の低い

役者が才能を見出してもらう機会

にもなっていたという。現行の演

出では、仲居の一人が立つて密で

九太夫の頭をはさみ、「九太さん

のおつむをこうつかみ、梅干なん

ぞはどでごんす」という一つだけ

にすることが多い。

二五 現行演出では仲居にさせる。

九太夫の頭を梅干に見立てたもの。

二六 これは古くさい。見立ては趣

向が新奇であるのがその生命なの

で、し古したもののは評価が低い。

二七 由良之助は一瞬ためらうが、

ここで九太夫の申し出を断つては

本心を知られてしまい、これまで

の苦心が水の泡となってしまうの

で、すぐに受け入れる決心をする。

この時の内心の苦しさは、後の述

懐で明らかにされる。二一九ペー

ジ五行目以下を参照。

二八 喜んで味わわせてもらおう。

二九 没した日。毎月その日を「命

お大切と申すが、見事その蛸、貴殿は喰うか。
 由良 喰^一べいでなろうか。たゞし主君塩治殿が蛸になられたという便宜^三があつたか。愚痴^四な人ではある。こなたやわしが浪人したは、判官殿が無分別^五から起こつた事。スリヤ恨^六みこそあれ、精進する氣微塵^六もござらぬ。お志の肴、賞翫^六いたそう。(ト思入れ)

へ何氣もなく、たゞ一口に味わう風情、邪智^七深き九太夫も、呆^八れて詞^九もなかりける。

さてこの肴では飲めぬ。鶏^{一〇}しめさせ鍋焼^{一一}させん。(ト思入れ) サアく皆唄えく。(ト思入れ) 足許^{一二}もしどろもどろに浮き拍子。

九太夫 テレツクく、ツツテンく。

(ト箸にて鉢を叩き)

由良 おのれ末社^{一三}ども。

へめれんになさで置くべきかと、騒ぎにまぎれ入りにける。

(ト踊り地になり、由良之助踊って、皆々付いて奥へ入る。九太夫は残り、夢中に鉢を叩きいる。奥より伴内出て来たり)

伴内 九太夫殿く。(ト思入れ) コレサ九太夫殿、(ト思入れ)

(ト背中を叩き、兩人思入れあつて)

仔細^{一四}とつくと見届け申した。主^{一五}の命日に精進させぬ根性で、敵討^{一六}つ所存はござるまい。このとおり主人師直公へ申し立て、用心^{一七}の門を開かせましよう。

九太夫 なるほど、もはや御用心にも及ばぬ事でござる。

伴内 コレサ、まだこゝに刀を忘れておきました。

(ト由良之助の大小を置きたるを見て)

九太夫 ほんに誠に大馬鹿者の証拠^{一八}、たしなみの魂御覧なされい。

伴内 (ト伴内取つて抜いて見る。中身錆びているゆえ)

伴内 いかさま、さて錆^{一九}びたりな赤鯛^{二〇}。

兩人 ハ、、、。

九太夫 いやく本心現われ、御安堵^{二一}く。

(ト下手より駕籠屋出て来たり)

駕籠屋 お駕籠をまわして置きました。

(前ページ注続き)
 日)として仏事を営んだ。
 三 仏事をとり行う日の前夜。葬儀の前夜をもういう。とくに厳しく精進する日とした。

一 食べないでおこうか。

二 あるいは。

三 たより。音信。ここは冥土からの知らせの意。

四 おろかな人。

五 思慮分別に欠けること。

六 恨みはあるとしても、精進をして身をつつしむ氣は少しもありません。「精進」は身をきよめ、行いを慎しみ、肉食などをしないこと。

七 鍋でものを煮ながら食べる料理。

八 足もとも乱れに乱れて浮いた調子にのり。「浮き拍子」は三味線を人の心を浮き立たせるように演奏すること。「しどろもどろに浮く」とかけてある。

九 「テレツクテレツク」は太鼓の調子、「ツツテンテン」は三味線の調子にいう擬声語。

一〇 幫間の異称。客の大尽(大臣)を「大神」にかけて本社にたとえ、幫間をそれに従う末社と名

づけたもの。

二 「めれん」は酒に酔って正体を失ってしまうこと。泥酔すること。めろめろに酔わせないでおこうか。

三 とくと。しっかりと。

四 油断せず心くばりをして用心している態勢を解かせることにしましょう。

五 刀は武士の魂とされる。だから、これを見れば常日頃の武士としての心がけがわかる。それを御覧なさい。

六 ようもまあ赤鯛というほどにまっ赤に刀を錆びさせたものだなあ。「赤鯛」は赤くさびのついた刀を見立てた表現。

(ト駕籠をよろしき所へ置く)

九太夫 サ、伴内殿、お召しなされ。

伴内 まず御自分は御老体の儀なれば、平に。

九太夫 しからば御免下されい。

(ト九太夫、駕籠の中へ入り、垂れをおろす)

伴内 イヤナニ九太夫殿、承れば、ここに勘平が女房が勤め居ると聞きまして、貴殿には御存知ないか。九太夫殿。(ト思い入れ)

(ト返事なきゆえ、駕籠の垂れをあげる。内に飛石あるゆえ、びつくりして)

コリヤどうじゃ。九太夫は松浦佐夜姫をやられたそうナ。

(トこの時、縁の下より九太夫首を出し)

九太夫 伴内殿。

伴内 九太夫殿。

九太夫 シイ。(ト思い入れ)

(ト辺りへ思い入れあつて)

コレく伴内殿、九太夫が駕籠抜けの計略は、最前力弥が持参せし書翰が心もとなし。様子見届け跡より知らさん。やはり我らが帰る体にて、貴殿

はその駕籠に引き添えて、ナ。

伴内 なるほど。(ト思い入れ) ソレ、石をやれ。

へ駕籠には人の在る体に、見せてしづく立ち帰る。

(ト踊り地になり、伴内駕籠に付いて向こうへ入る)

へ折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔い醒まし、はや里なれて吹く風に、憂さを晴らして居る所へ。

(ト二階の障子引き抜く。内におかる、しごき形にて団扇を持ち、手摺に寄りかゝり居る。奥より由良之助出て来たり)

由良 ちよつと往つて来る。由良之助ともあろう侍が、大事の刀を忘れて置いた。ツイ取つて来るその間に、掛物もかけ直し、炉の炭もついで置きやア、それく、こちらの三味線踏み折るまいぞ。(ト思い入れ) これはし、九太夫、(ト思い入れ) 九太夫はもう、往なれたそうナ。
(ト知らせにつき、正面の暖簾切つて落とす。独吟になり)

お乗りなさい。

二 どうぞどうぞ。

三 日本庭園で、人が伝い歩くために少しづつ離して風情よく飛び飛びに敷き並べてある石。

四 松浦佐用姫の伝説そのままに石に変じてしまわれたらしい。

『万葉集』、『肥前国風土記』に出る伝説。佐用姫の夫、大伴狹手比古(さでひこ)は大將軍に任ぜられて、任那(みまな)鎮定のため出發することになる。佐用姫は愛する夫との別離を悲しみ、高山の頂上にのぼって船が見えなくなるまで領巾(ひれ)を振り、そのまま石に化してしまつたという。この周知の伝説をふまえて、石に化けてしまつたと言つたもの。

五 駕籠や建物の方の口から入り、中に居るよう見せかけておいて、他の口から抜けて逃げることをいう。

六 このせりふ、現行の演出ではいいわい。その代わり、駕籠屋二人が、べらぼうに重いからちよつと中を見ようと言ひ、垂れをあげてみて、思わず「い」というのかおせて、伴内が「しーッ」と制することがあり、観客を笑わせる。

七 その折に。折から。

八 早くも廊(くるわ)の風習に慣れてきて。

九 「しごき」はしごき帯の略。

一〇 ちよつと。すぐに。

一一 床の間の掛け物。書画の軸。

一二 座敷の炉。炉は床を四角に切つて火を燃やし、暖をとるところ。

一三 おやおや、これはいつたいどうしたことだ。意外なことに驚いて発する語。

一四 現行の演出では、「九太夫殿、九太夫殿」と言いながら、置き忘れてある刀を取り上げ、ちよつと抜きかけて、確かめた上、パチンと音をさせて納め、思い入れをしたあと、「九太はもう、往なれたそうナ」のせりふを言う。

一五 きつかけを知らせる合図の柝がチョンチョンと入ると、長暖簾を切つて落とす。すぐに下座の独吟にかかるという段取り。

一六 下座で一人で歌を歌うこと。

唄へ父よ母よと泣く声聞けば、妻に鸚鵡のうつけし言の葉。エ、なんじやいな、おかしやんせ。

へあたり見廻し由良之助、釣燈籠の燈りを照らし、読む長文は御台より、敵の様子細々と、女の文の後や先、参らせ候ではかどらず。

(ト由良之助、手水鉢の柄杓を取って手を洗い、以前の文を出し、立身にて読む思い入れ)

へ余所の恋よと羨ましく、おかるは上より見おろせど、夜目遠目なり字性もおぼろ、思いついたる延鏡、出して映して読み取る文体。

(トおかる延鏡を出して見る思い入れ。縁の下より九太夫出かゝり、由良之助が段々文を巻き取り、読む思い入れ)

へ下家よりは九太夫が、繰り下ろす文月影に、透かし読むとは神なら

ず、ほどけかゝりしおかるが簪、ばったり落つれば、下にははつと、見上げて後ろへ隠す文、縁の下には猶笑壺、上には鏡の影隠し。

(トおかる簪を落とす。由良之助びっくりして後ろへ文を隠す。九太夫この文を引き切り、縁の下へ入る。三人とたんの思い入れ、おかる下家を見て)

おかる 由良さんか。

由良 おかるか。そもじはそこに何して居やる。

おかる わたしやお前に盛りつぶされ、あんまりつらさに酔い醒まし、風に吹かれてゐるわいなあ。

由良 ム、よう風に吹かれてじゃの。(と思ひ入れ)イヤおかる、ちと話したい事がある。屋根越しの天の川で、こゝからは言われぬ。ちよつと下りてたもぬか。

おかる 話したいとは、頼みたい事でござんすか。

由良 マア、そんなものじゃ。

おかる そんなら、廻つて来やんしょう。

由良 イヤく段梯子へ下りたれば、仲居が見つけて酒にしよう。ア、コ

一 当時流行した三味線歌の一。
二 軒先などに釣り下げる燈籠。
三 長文の手紙。
四 女性の手紙ゆえに前後がきちんとととのつておらず。
五 「……参らせ候」をいくたびも用いた女性特有の手紙の書き方がしてあるために、長文になり、だからだらしてゐてなかなか読むのに時間がかかる、の意。
六 自分とはかかわりのない他人の窓。由良之助があたりをばかりながら女文字の長い手紙を読むのを見て、おかるは咄嗟に女性から来た恋文だと思つたのである。
七 夜でもあり、かつ遠く離れたところから見ることでもあつて、文字の形もはっきりしない。
八 ある物を直接見ないで、鏡に写して読むこと。「延鏡」には懷中に入れておく鏡という意味もある。ここは両方の意を兼ねた文脈になっている。
九 浄瑠璃の本文は「文章(ぶんしょう)」。二「下家」は別棟の一階の建物だが、ここではその縁がわの下を指している。
三 神ならぬ身でそれに気付かなかった。神の縁語で仏(ほとけ)を連想させ、「ほどけかゝりし」

とつづけた。

三「笑壺に入る」の意。思うように運んでほくそえむこと。大変喜ぶこと。

四 鏡の光をかくして。鏡がきらきらと光るのをかくして。

五 歌舞伎のト書き用語の一つで、二つ以上のことが同時に起こるのを指示する時に使う。ここは由良之助、おかる、九太夫が三人同時にそれぞれ内心の思いを表現して思ひ入れをすることを指示した。

六 別棟の一階の方。

七「そなた」の「そ」に文字をつけた女性語。あなた。

八 酒をのませて正体がないほどに酔わされ。

九 距離が隔たつていて、話が通じないことのとえ。七夕伝説の牽牛と織女が天の川に隔てられて、一年に一度しか会えないことから、屋根ごしではまるで天の川のようなものだとの意。

三 二階へ上がるための正式の梯子段のこと。「階段」というに同じ。

由良之助は、ここでおかるが仲居などに会つて厄介なことになるのを避けたいと考えている。

レ、どうしたものじゃ。(ト思入れ)

(ト二階下にある九つ梯子を取って)

コレく、幸いこゝに九つ梯子、これを踏まえて下りてたも。

へ小屋根にかくれば、

(ト梯子を二階へかける。おかる下りかゝり)

おかる この梯子は勝手が違うて、どうやらあぶないものじゃ。

由良 大事ないく。あぶない怖い昔の事、三間ずつ跨いでも赤膏薬もいらぬ年ばい。

おかる 阿房言わんすな。船に乗ったようで、怖いわいなあ。

由良 道理で船玉様が見える。

おかる のぞかんすないなあ。

由良 洞庭の秋の月様を拝み奉る。

おかる そんなら降りやせぬぞえ。

由良 降りずば身どもが降ろしてやる。(ト思入れ) 逆縁ながら。(ト思入れ)

へ後ろより抱きしめ抱きおろし、

おかる、何ぞそもじは御覧じたか。

おかる アイ。(ト思入れ) イ、エ。

由良 見たであろく。

おかる なんじゃやら面白そうな文を。

由良 皆読んだか。

おかる オ、くど。

由良 ア、身の上の大事とこそはなりにけり。

おかる 何のことじゃぞいなあ。

由良 何のことは、おかる、古いが惚れた。女房になつてたもらぬか。

おかる おかんせ、嘘でござんしょう。

由良 サ、嘘から出た誠でなければ根がとげぬ。応と言やく。

おかる イヤ、言うまいわいなあ。

由良 そりやなぜ。

おかる お前のは、嘘から出た誠じゃない。誠から出た嘘じゃわいなあ。

一段が九つ付いている梯子。

一階の庇(ひさし)屋根を小屋根という。二階の屋根を大屋根というのに対する。

三 いつもの階段と様子が違って。

四 心配ない。

五 こんな程度のこと、危ないとかかわいとかいって騒ぎ立てるような年齢でもあるまい。そんなのは子どものいうことで、とうの昔に卒業しているはずだ、の意。

六 ふつう一間は六尺(約一・八メートル)だから、三間は約五・四メートルに当たる。三間ずつまたぐなどということは出来るわけはなく、股を大きく開くことを誇張していったもの。

七 赤色をした裂傷のための血止め薬。処女でもあるまいし、たとえ大きく股を開いても、そのために陰部に裂傷が生じて赤こうやくを付けねばならぬような年ごろじゃない。「年ばい」は年ごろ。

八 「船霊(ふなだま)様」のこと。航海を守る神。海路の安全を守る神。女陰のことを船霊様と俗にいったことから、おかるが船に乗ったようだといった縁で、「道理で船霊様が見える」と悪じやれを言った。

九 洞庭は中国湖南省にある著名

な湖。この地の秋の月は瀟湖八景の一つとしてすばらしい景色に数えられた。ここは船玉様と同じく女陰を指している悪じやれ。

一〇 逆縁は仏語で、順当でないこと。で仏縁を結ぶこと。ここでは女を前から抱くのが順、後ろから抱くので逆縁だが……としやれたもの。この前後の色チャリといわれるきわどいせりふは、近年とかくあつさりと片付ける傾向がある。高尚趣味だった九代目市川團十郎は、すべて廃して、代わりに「天津乙女の御降臨」とだけ言ったそうである。

一一 「くどいこと」の略。しつこい。

一二 一身上の大変な事態になったという由良之助の本心を言うのだが、わざと冗談めかして歌うようにいう。

一三 言い古された月並のことばだが、お前に惚れた。

一四 およしなさいな。

一五 始めは嘘のつもりで話していることが、いつの間にやらそのことばどおりになつてしまふ、という意味の諺。

一六 やり遂げられない。

一七 承知したと言つてくれ。

由良 おかる、請け出そう。

おかる エ、。

(トびつくり思い入れ)

由良 嘘つかぬ証拠、身請けしよう。

おかる イ、エ、わたしには、

由良 間夫があるなら添わしてやろう。暇がほしくば暇やろう。

おかる すりやほんまに。

由良 侍冥利、三日なりとも開うたら、それからは勝手次第。

おかる 嬉しゅうござんす。と言わしておいて笑うでな。

由良 イヤ、すぐに亭主に金渡し、今の間に埒さそう。氣遣いせずと待つて居や。

居や。

おかる そんなら必ず待つてゐるぞえ。

由良 金渡しして来る間、どっちへも行きやるな。女房じゃぞ。

おかる それもたつた三日。

由良 それ合点。

おかる エ、嬉しゅうござんす。

由良 この由良之助に請け出されるが、それほどまでに嬉しいか。

おかる アイ。
由良 あの嬉しそうな顔わいの。

唄へ世にも因果な者なら私が身じゃ、可愛い男に幾世の思い、エ、なん
じやいな、おかしやんせ、忍び音に啼く小夜千鳥。

(トこの内、由良之助思い入れあつて、奥に入る。おかる硯箱を出し、
文を書く事よろしく)

へ奥で唄うも身の上と、おかるは思案とりぐの。

(ト跡踊り地になり、平右衛門出て来たり、山崎から来ているおかる
という女を聞く事よろしくあつて、トミ)

平右 ヤ、わりやおかるじゃないか。

おかる ヤ、兄さんか。(ト思い入れ) 恥ずかしい所で逢いましたなあ。

(ト顔を隠して思い入れ)

平右 苦しゅうない。関東より戻りがけ、母人に逢ってくわしゅう聞いた。

一 身請けしよう。身請けは五年
なら五年と年季を定めて身を売つ
た遊女の身代金(みのしろきん)
を支払って、その商売から身を引
かせること。これを請け出すとも
いう。

二 情夫。遊女のかくし男。

三 結婚させてやろう。

四 武士が使った誓約のことば。

決して嘘いつわりは言わないとい
う誓いのことば。

五 女性を妾として別宅などにひ
そかに住まわせることを「開う」
という。

六 「笑おうでな」。笑おうとい
うのでしよう。

七 きまりをつけさせよう。(お
かるを) 身請けするための契約を
とりつけよう。

八 世の中にもとりわけて不幸せ
な者は私の身の上だ。「因果」は
前世の悪業の報いとして現世の不
幸があると考えられていたことか
ら、転じてこの世における不幸、
不運の意になった。

二 この上なく恋しさのまざる思
い。

二 夜なく千鳥がかすかな声でま
るでしのででもいるように悲し
げに泣くように、私は男を思っ

ひそかに泣いている。
三 「へ世にも因果な」は二〇四べ
ージの「父よ母よ」の歌と同じ
歌謡の一節で、下座の独吟で歌わ
れる。それを奥の部屋から聞こえ
てくる歌とし、おかるが自分の身
の上(勘平を恋しいと思って、今
日までひそかに涙を流す毎日を送
ってきたこと)に引きくらべてい
る。

三 あれやこれやといろいろな考
えが浮かんで。思いもよらず身請
けの話が出たので、走馬燈のよう
にさまざまな感情が走りまわつて
おろおろと落ちつかぬさま。

四 口用語集

五 「われ」は対称。男が目下の
者に対して使う。お前。「われは」
が「わりやア」となまったもの。
六 遊女となつて遊里に居るのを
恥じている。

夫のため、お主のため、よく売られた。出かしたく。

おかる そう思つて下さんすりや、わたしや嬉しいが、したがまあ悦んで下さんせ。思いがけのう、わたしや今宵請け出さるゝ筈じゃわいなあ。

平右 ム、それは重畳、シテ何人のお世話で。

おかる あ、お前のご存じの大星由良之助様のお世話でな。

平右 ナニ、由良之助様に請け出さるゝ。それはまた、下地からの馴染とてそういう事か。

おかる なんのいなあ。この中より二三度酒の相手、夫があらば添わしてやろ、暇がほしくば暇やろと、結構すぎた身請けの相談じゃわいなあ。

平右 そんなら、われを勘平が女房と、

おかる イ、エ、知らずじゃぞえ。親夫の恥なれば、明かして何の言いましよう。

平右 ム、すりや本心放埒者。お主の仇を討とうという所存はないに極まつたな。

(トきつと言う。おかる止めて)

おかる イエ、あるぞえ。高うは言われぬ、コレ。

へこうくとさ、やけば、

平右 ム、すりやその文をたしかに見たか。

おかる アイ、残らず読んだその後で、互に見合わす顔と顔、それからじやらつき出して身請けの相談。

平右 アノ、その文残らず読んだ後で。

おかる あいなあ。

平右 ムウ。(ト思い入れ)よめた。

(ト大きく言う)

おかる びっくりするわいなあ。

(ト平右衛門、奥へ向かい)

平右 御免なされて下さりませ。只今のよう申しました、ありや下郎の浅慮ゆえ、只今の悪口、よくも罰があたらんのだ。

おかる 何を言わしゃんすぞいなあ。

平右 コレ妹、頼みがあるが、なんと聞いてくれぬか。

おかる お前の頼みなら、何なりと聞かいでかいなあ。

平右 聞いてくれるなら、ちよつと来い。

一 しかし。だが。
二 この上なく喜ばしいことだ。
三 もともとからのなじみ。「馴染」は男女が馴れ親しむこと。また、特定の遊女のもとへ遊客が通いなれて、格別の親しい関係になつてゐることをいう語。
四 どうしてそんなことがありましよう、そんなことはないと強く否定する反語の表現。
五 この数日の間。
六 いいことすぎた。条件がよすぎるくらい。
七 本心から酒や色におはれてしまつてゐるだらしない人間。
八 大声では言えない。

九 色めいていやらしく言い寄ること。
一〇 わかった。浄瑠璃の本文に「聞こえた」とある。同意である。(由良之助が考えていることが)理解できた、の意。
一一 身分地位の低い男。
一二 思慮、考えが浅いため。
一三 どんなことでも聞かないことがありましようか、何事でも聞きます、の意。

おかる シテ兄さん、お前の頼みとわえ。
平右 妹、われが命は兄が貰った。

(ト踊り地になり、抜き討ちに斬りつける。兩人立ち廻りよろしくあつて、おかる花道枝折戸の外へ行く)

おかる コレ兄さん、わたしには何あやまり、勘平という夫もあり、きつと二親のあるからは、こなさんの儘にもなるまい。請け出されて、親夫に逢おうと思うがわたしや楽しみ、どんな事でもあやまろう。どうぞ赦して下さいなあ。

へ手を合わすれば平右衛門、抜き身を捨て、どうど伏し、悲歎の涙にくれるが、

(ト平右衛門、抜き身を捨ててどうと座し、思い入れあつて)

平右 可愛いや妹、わりや何にも知らぬな、親与一兵衛様はな、六月二十九日の夜、人に斬られてお果てなされたわいやい。

おかる エ、、、。(ト思い入れ)ソリヤまあ、ほんの事かいなく。

(トびつくり思い入れ)

平右 こりゃく、まだびつくりすることがある。(ト思い入れ)われが請

け出されて添おうという勘平はな。

(ト言い兼ねる思い入れ)

おかる 勘平殿はどうさしやんしたえ。

平右 勘平はな。

おかる 女房さんでも持たしやんしたかえ。

平右 そんな浮いた事じゃねえ。

おかる どうしなさんしたぞえ。

平右 アノ勘平はな。

おかる 勘平殿はえ。

平右 腹切って死んだわやい。

おかる エ、、、。(ト思い入れ)ウ、く。

へこれのうくと取りついて、わつとばかりに泣き沈む。

(ト平右衛門思い入れ、おかる反り返る。平右衛門びつくり思い入れ。いろいろ介抱して、水を飲ませる事などあつて)

一 刀を抜くやいなや急に切りつける。

二 きつとした。立派な。文句のつけようのない。

三 親しみをこめて呼ぶ対称の代名詞。あんた。

四 「どうと」に同じ。

五 このせりふによつて、五段目の山崎街道で起こった事件の日の陰暦六月二十九日の夜であったことがわかる。

六 本当のこと。「ほん」は本当、まこと。

七 以下、勘平が死んだことをなかなか言い出せないで躊躇するやりとりの件りは歌舞伎の入れ事。浄瑠璃の本文はあつさりト「請け出され添おうと思う勘平も、腹切って死んだわやい」と語る。へ浮かれた話。男女の色事をさして言った。九 瘡がさしこんで、うんと反ること。

平右 コレ妹、女は氏無うて玉の輿と、百姓づれの娘のそちが、塩治様の御家中で重役たる早野三左衛門様の御子息勘平殿と夫婦になつたは、親に勝つた仕合わせ者だ。わればかりか俺までも、つながる縁の兄ゆえに、足輕風情の平右衛門が、口はどつたく、ヤイ勘平、ソレ勘平、と呼び捨てにするもつたいなさ。これというのもそちがお陰だ。そのかわりにやあまた百姓と違つて侍の女房になれば、お主のためには御馬前で、討死をばしようも知れぬ。いつ何時の限りなく、はかない別れをしようも知れぬ。その時未練な心を出さぬが、武士の女房が身の覚悟。わりやあそれを、承知であらうな。

（トおかる思い入れあつて）

おかる よう得心しているけれど。（ト思い入れ）そうして母さんはえ。

平右 様子話せば長い事、お痛わしいは母者人。言い出しては泣き、思い出しては泣き、娘おかるに聞かしたら、泣き死にするであらう、必ず言うてくれるなどのお頼み。言うまいと思えども、とてものがれぬそちが命。その訳は、忠義一途に凝り固まつた由良之助殿、勘平が女房と知らねば請け出す義理もなし、もとより色には猶耽らず、見られた状が一大事、請け出して刺し殺す、思案の底と見て取つた。よしそう無うても壁に耳、外より

洩れてもその方が科。密書をのぞいて見たるがあやまり、殺さにやならぬ。人手にかきようよりわが手につけ、大事を知つたこの女、妹とて免されずと、それを功に連判の、数に入つてお供に立たん。（ト思い入れ）

へ小身者の悲しさは、

人に勝れた心底を見せねば数には入れられず。こりや、聞きわけてくれ、妹。

へ事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上げく、便りのないは身の代を役に立てゝの旅立ちか、暇乞いにも見えそなものと、恨んばかり居りました。

おかる 勿体ないが父さんは、非業な死でもお年の上、勘平殿は今年ようく三十に、（ト思い入れ）

へなるやならず死ぬるとは、

一 女は家柄がなく育ちがいやくても、容貌や運次第では貴人の愛を得て、高い地位を得ることができるといふ諺。「氏なくして玉の輿」が正しい。
二 身分の低い百姓の娘。「づれ」は名詞につき、せいぜいその仲間だといった意味を添える語。みづからへりくだつて言う時に用いる。
三 おまえ。主に男性が目下の者に対して使う対称代名詞。
四 重要な役職にある人。
五 身のほども考えないで大きなことを言うさま。
六 多くの一般の百姓。
七 武士は、主君のためにはいつ何時その馬前で討死をすることになるかも知れない。
八 どうして逃れることができないお前の命なのだ。
九 忠義一すじ。
二 心底。胸の底の考え。
三 たとえそうではなくても。
三 秘密にしないでほならないことからも、どこから洩れるかわからないことのとえ。「壁に耳あり」という。

四 人の手にかけて殺されるよりは。つまり、由良之助に殺されるよりは。「かきようより」は「かけようより」。
五 手柄。
六 身分の低い者。俸禄の少ない者。平右衛門は五両に三人扶持の足輕の身分であつたから、こう言つた。一九二ページ一二行目参照。
七 事情をくわしく説明すること。
八 涙にむせて。
九 勘平から何の音信もないのは、自分を売つた身代金を役に立てて東への旅に出たのだろうか。それならば、いとま乞ひに來られそうなものだ、（来てくれないことを）恨んでばかりいました。
一〇 思いもかけない災難で死んだこと。

さぞ悲しかろ、口惜しかろ。

平右 逢いたかったであらうなあ。

おかる アイ。(ト思い入れ)

へなぜ逢わしては下さんせぬ。^一親夫の精進さえ、知らぬはわたしの身の因果。

なんの生きて居りましょう。(ト思い入れ)サ、手にかけて下さんせ。

平右 ム、よい覚悟だ。南無阿弥陀仏。

おかる さりながら。(ト思い入れ)

へお手にかゝらば母さんが、お前をお恨みなされましょう。

自害したその後で、首なりと死骸なりと、功に立つなら功にさんせ。さらばでござんす。

へ言いつゝ刀取り上ぐる。

(ト平右衛門の抜き身を取って自害しようとする。この時、奥より由良之助出て来て)

由良 ヤレ待て暫し、死ぬるに及ばぬ。

(ト兩人、由良之助を見て)

平右 あなたはお頭山良之助様。

由良 兄弟とも見上げた心底、疑い晴れた。兄は東の供を許す。平右衛門、血判いたせ。

平右 へい。アノ血判。エ、ありがとうござりまする。

へ天へものぼる心地して、悦び勇むぞ道理なり。

(トよろしく血判する事あつて)

由良 妹は長らえ未来の追善。

おかる その追善は冥途のお供。

(ト刀を持ち、思い入れ)

一 親与一兵衛や夫勘平の死んだことを知らず、その命日に、供養のための精進することさえできなかったのは、私の身の不幸というものだ。

二 それが手柄になるというのなら、どうぞ手柄になさい。

三 感心な心の内を知って。

四 小身者だから、軽々に敵討ちの連判に加えてほしいと言っているけれども、いつ気が変わるかも知れないと、山良之助は平右衛門の忠義の心を疑いをもって見ていたことがわかる。その疑いが晴れたというのである。

五 討入りのために鎌倉へ下る旅の供。

六 大喜びをして有頂天(うちようてん)になるさま。

七 妹のおかるは長生きをして、死者の冥福を祈って仏事供養をいとなめ。

八 その追善は、なくなつた与一兵衛と勘平のあとについて、冥土へのお供をすることです、と自害する決意を示す。

由良　こりや待ておかる、夫勘平連判には加えしかど、敵一人も討ち取らず、
未来で主君に言い訳あるまい。その言い訳は、こりやこゝに、（ト思い入
れ）

へぐつと突つ込む畳のすきま、下には九太夫肩先縫われ、七転八倒。

（トおかるが刀持ち添えて、床下に突つ込む。下には九太夫苦しむ）

それ平右衛門、引き出せ。

平右　ハッ。

へ下知より早く縁先飛び下り、朱に染みたる骸をば、無二無三に引き
摺り出し、目通りへ投げつくれば、起こしも立てず由良之助、髻を掴
んでぐつと引き寄せ、

（ト平右衛門、縁の下より九太夫を引き出す。由良之助、襟髪を取り、
きつとなつて）

由良　ヤア、獅子身中の虫とはおのれが事よな。わが君より高知を戴き、莫

大の御恩を被ながら、敵師直が犬となつて、ある事ない事よくも内通ひろ
いだな。コリヤヤイ、四十余人の者どもはな、親に別れ子に別れ、一生連
れ添う女房を、君傾城の勤めをさせるも、亡君の仇を報じたさ、寝覚めに
も現にも、御切腹の折柄を思い出しては無念の涙、五臓六腑を絞りしぞや。
取り分け今宵は殿の逮夜、口にもろもろの不浄を言うとも、慎しみに慎し
みしこの由良之助に、よくも魚肉を突きつけたな。いやと言われず、応と
言われぬ胸の苦しさ、咽を通したその時の心、どのようにあろうと思う。
五体も一度に悩乱なし、四十四の骨々も砕くるようにあつたわやい。魔王
め、人畜め。

へ土に摺りつけ捻じつけて、無念の涙にくれけるが、

平右　いっその事に下郎めが。

（ト平右衛門立ちかゝるを）

由良　こりや待て、平右衛門。この場で殺さば事訳むずかし。喰らい酔うた
る体にもてなし、館へ連れよ。

一 肩先を刀で突きとおされて。
二 ころげまわって苦痛のさま。
三 命令を受けるやいなや。
四 ただ一心に。ひたすらに。
五 目の前。面前。
六 髪を頭の頂上で束ねたところ。
七 獅子の身体の中に住んでいて、
八 高緑。高い俵。斧九太夫は
塩治家の家老職として由良之助の
千五百石よりも多い二千石を貰つ
ていた。

九 隠密。スパイのこと。
一〇 ねむりから目覚めた時にも、
一一 また目がさめている間も。寝ても
さめても、四六時中の意。
一二 けがれたこと。
一三 全身のこと。
一四 悩み苦しみ、心乱れるさま。
一五 全身の骨。漢方によると、人
体は四十四の骨で組み立てられて
いるという。
一六 人間の姿をしている畜生。
一七 理由づけ。いいわけ。弁解。
一八 めんどどうになる。厄介だ。
一九 酒を飲みすぎたというように
見せかけて。

〔次ページ注〕

一 いちいち。これまでの何もかも
すべて。底本は三人侍が
「段々」と言いかけるのを、由良
之助が「こりや」と止めることに
なっているが、浄瑠璃の本文は
「段々誤り入ましてござります」と
あり、三人侍がいままで由良之

へ羽織打ち着せ疵の口。

(ト平右衛門、九太夫に羽織をかける)

へ隠れ聞いたる矢間千崎竹森が、障子がらりと引き明くれば、

三人 由良之助殿、段々、

由良 こりゃ。(ト思入れ) 平右衛門、喰らい酔うたるその客に、加茂川

でな、(ト思入れ) 水雑炊を喰らわせい。

平右 ハッ。

由良 行け。

(ト踊り地になり、平右衛門、九太夫を肩に引っかけ、由良之助、おかる、よろしく)

幕

八段目 道行旅路の嫁入

本蔵妻戸無瀬

同 娘小浪

奴吉平

奴運平

旅人数名

(本舞台、後ろ大黒。富士の遠見の杉並木、絵模様の道具。後に行列の嫁入道中を見せる誂えあり。上手に竹本連中居並び、駅路馬士唄の合方にて幕明く)

へ浮世とは誰が言い初めて飛鳥川、扶持も知行も瀬と替わり、寄辺も浪の下人に、結ぶ塩冶の誤りは、恋の枷杭加古川の、

助に対してとってきた所業を陳謝することになっている。こども、陳謝の気持で「段々」を言うが、なお警戒を怠らぬ由良之助がそれを終りまで言わせないという形にしている。

二 京都市の東部を流れる川。

「鴨川」とも書く。

三 水の分量の多い雑炊。雑炊は酔いざめの食べ物として適するとされていたことから、くらい酔ったこの男に雑炊を食べさせてやれ、と表面上言い、その実は加茂川へ投げこんでしまえ、と命じたのである。

四 黒幕の別称。本来黒幕は場面が夜であることを示すのに用いられるので、ここに使うのは異例である。のちに場面を移動させて富士山の裾野の道具を見せるので、その時に黒幕を切って落とすことになる。

五 口用語集

六 下座音楽の一。「駅路」は馬についている鈴で、馬士唄・野良唄にかぶせて聞かせる楽器の称である。「馬士唄」は馬士が馬を曳きながら唄う唄で、「箱根八里」と俗称する。ここから唄を除いて三味線の合方として用いるのが「馬士唄の合方」で、街道・田舎

などの場面の幕明き、幕切れ、人物の出入りなどに演奏する。駅路の鈴をかぶせるのが約束である。

七 はかないこの世の中。

八 「古今和歌集」(巻十八)に、

「世の中は何か常なる飛鳥川 昨日の淵ぞ今日は瀬となる」とあるのにもとづき、人の世の有為転変がはげしく無常であることのとえに用いられる。飛鳥川は奈良県にある川の名で、淵(深い所)と瀬(浅い所)が変化しやすいことで知られた。主家が没落したために境遇が急変したことをたとえる。九 「淵」を「扶持」にかける。これまでは扶持も知行ももたらって安穩に暮らしていたのが、たちまち境遇が変わり、いまでは頼りどころもない浪人の身になってしまっている。大星由良之助一家を指す。

一〇 よるべ(頼りにするところ)

も「なし」に「浪」をかける。

「川」と「瀬」と「浪」は縁語。

「浪の下人」で浪人を表現する。

二 「結ぶ縁」を「塩冶」にかけ、縁結びはしたものの、塩冶判官の誤りのために恋もせきとめられた加古川本蔵の娘小浪。

三 かせとなつてせきとめる杭(くし)。